

令和3年度 相馬市立中村第一小学校 研究の概要

1 研究主題

児童一人一人が造形的な見方・考え方を働かせ、資質・能力を発揮して、表現や鑑賞の活動を行い、
つくり出す喜びを味わうことのできる図画工作科の指導はどうあればよいか

2 研究計画

(1) 求める子どもの姿

造形的な見方・考え方を働かせることで、つくり出す喜びを味わうことができる子ども

(2) 研究仮説

求める子どもの姿に迫るために仮説を次のように設定した。

材料との出会いで発想をふくらませ、個に応じた教師の働きかけを工夫すれば、自分の思いを豊かに表現していくであろう。

(3) 研究内容

〈1年次〉

- ◎ 材料との出会いで、自分のイメージをふくらませることのできる授業の展開の工夫
 - ・材料銀行を設置したり、月ごとに作品を入れ替え展示したりし、豊かな材料に出合わせる。
 - ・自他の作品や取り組みの良さについて話し合う場を設定する。

〈2年次〉

- ◎ 造形的な見方・考え方を働かせることのできる教師の働きかけの工夫
 - ・自分の活動を振り返り、自分のよさや可能性に気付かせる機会を設定する。
 - ・自分の思いを表現できるように、言葉かけや参考資料の提示方法の支援を工夫する。

〈3年次〉(本年度)

- ◎ 題材全体の構成を意識した授業づくりの工夫

指導の重点

- ・題材を通して育みたい資質・能力の明確化
- ・題材間・学年間のつながり
- ・他教科等のつながり

} カリキュラム・マネジメントの視点

3 研究の概要

- ・本年度は、3年計画の3年次である。研究計画に沿って計画を進めていく。
- ・下学年・上学年ブロックに分かれ、同一研究テーマで研究を行う。
- ・全教職員が一丸となつての研究を推進するため、各自1回以上図画工作科における授業研究を年間を通じて実践する。ブロック研究部のサポートを受け、事前研や事後研での研修を含め、個々の授
業力・指導力を高めていくことができるようにする。
- ・各ブロック1本の代表授業を行い、全員で参観し、研究に関する共通理解を図ると共に、個々の授
業実践力の質的改善につなげるようにする。
- ・研修日(原則毎月第2金曜日)を設定し、校長・教頭の指導のもと研究協議会等で研究の共通理

解

を図ると共に、各研究部・個々の研究を推進する。

(1) 下学年ブロックの成果と課題

① 題材を通したつながり

- 第2学年の実践では、前時に指の動きを楽しむ活動に重点をおいたことで、本時のねらいである「指や手のひらを使って思いのままに描く」ことにつなげることができた。
- 第3学年の実践では、前時において用具の使い方をいろいろ試し楽しむ活動を行ったことで、本時のねらいに合わせて、どの用具を使ったらよいか考えながら自分の表したいことに合わせて用具を選ぶことができた。
- 第1学年の実践では、材料を段階的に提示したり、活動の場を段階的に広げていったりしたことで、題材を通して発想をふくらませ活動を展開することができた。



1 単位時間だけでなく、前時の活動が本時にどのようにつながるのか、本時のねらいに向かうため前時はどのような活動をすればよいか考え授業を組み立てていくことが、ねらい達成につながっていくことが分かった。

② 題材間とのつながり

- 第2学年の実践「とろとろえのぐでかく」では、液体粘土の感触を味わいながら生き生きと活動に取り組んだ。活動を通して、液体粘土の特色を感じ取ることができた。さらに、今後これまでの題材で使った材料・用具を子どもたちが表したいことに合わせて選択・活用することができるようにしていきたい。
- 段ボールを題材にした学習が多いので、開いたり組み立てたりなど前学年までの学習が活かされていた。
- 第1学年の小学校図画工作科の導入期において、形や色を基に発想をふくらませ、活動そのものを考え広げていく造形遊びを経験したことは、今後の学習の中で造形的な見方・考え方を働かせていくことにつながる。
- 第3学年の実践では、前学年までの学習でローラーやスタンプなどの用具を使用した経験はあったが、使用した回数が少なかったため、表現方法を考えた際児童から出されなかった。



材料や用具のよさや特徴を実感することができるような働きかけが必要となる。また、材料・用具コーナー等の環境整備を行い、目的に合わせてそれらを手に取ることができるようにしていくことが大切になる。さらに教師間で、使用した材料・用具について共通理解を図ることで、学年を越えて子どもたちの造形的な経験を生かした授業づくりができるようにしていきたい。

前学年までにどのような題材を学習してきたかを教師側が把握し、前学年、前時までに学習した中で生かせるものがないか考えつなげることが大切である。

③ 他教科等とのつながり

- 第3学年の実践では、国語科において話合いの仕方を学習したことで、友達の考えを認め、自分の考えを伝えながらグループで活動を進めることができた。図画工作科での成功体験が他教科での話し合いに繋がった。
- 第2学年の実践では、とろとろ絵の具の触った感触や指の動きを国語科で学習した「オノマトペ」を使って表した。言葉の感覚と動きの感覚をつなげることができた。



自他の取組のよさに気付いたり、認め合ったりすることは、教科横断的な資質・能力である人間関係形成能力の育成につながる。

どのような順序で活動を進めていくべきか子ども自身で段取りを考えていくことは、プログラミング的思考を育むことにつながる。

(2) 上学年ブロックの成果と課題 (○成果 ●課題)

① 題材を通したつながり

- 第4学年の実践では、前時にアイデアスケッチや種づくりをしてイメージを膨らませておいたことで、本時のねらいである「自分の表したいことに合わせて表し方を工夫する」ことにつながることができた。
- 第5学年の実践では、前時にたくさんの参考作品を見たことで、自分の作品のイメージを持つことができた児童が多かった。
- 第6学年の実践では、前時に自分で探したり集めたりした様々な材料に触れることを通して、自分が表してみたい筆を、材料の特徴や形から発想するよう呼びかけをした。事前にどんな材料を使ってどんな筆にしていくかを想像し、見通しを持って活動に取り組むことができた。
- 参考作品から、自分のイメージは膨らんだが、思い通りのアニメーションがつかれず、困り感を持っている児童がいた。事前に困り感を予想して準備をしておくことが大切である。



題材に対して、イメージを膨らませることは、その後の授業を意欲的に進めていくのに有効である。しかし、膨らんだイメージを実際に表現するというときに困り感を感じている児童がいた。つまりきそうなことを全員でやってみせるなど、困り感を予想した手立てが必要である。

② 題材間とのつながり

- 第4学年の実践では、今までに経験してきた技法に十分に慣れ、自分の表したいことを表すことに生かし、進んで描くことができた。
- 第5学年の実践では、使用したアプリケーションが再生や画像の削除もボタン一つですぐに行えるため、「つくり、つくりかえ、つくる活動」を容易に繰り返しながら、よりよい作品にしていく活動に意欲的に取り組むことができた。
- 第5学年の実践で使用した ICT 機器は、様々な題材で活用することができる。実際に見る、聴く、触れるなどの身体感覚を働かせて学習する活動と ICT を活用する活動を、学習のねらいに応じて教師が見極めて、適切かつ効果的に活用することが重要である。
- 第6学年では、最高学年となり、既習内容は増えたものの、用具や材料を適切に使う技能には個人差が見られる。



これまでの題材で、どのような材料に触れ、どのような技法を行ってきたのかを教師が把握し、その題材で生かせる材料の特性や技法を再確認し、安全・安心に材料や用具を使うことができるという自信を持たせることが児童の意欲を向上させることにつながると考える。また、「つくり、つくりかえ、つくる活動」を繰り返し行うことで、その活動に抵抗なく取り組む児童が見られるようになってきた。

③ 他教科等とのつながり

- 作品を通して自分の活動の過程を振り返ったり、つくりつつあるものを全体的に見直しながら活動したりすることは、自己を俯瞰的に見る視点（メタ認知）を育むことにつながり、他教科等の学習生活にも生かされていくと考える。
- 5学年実践では、次時以降、物語性のある作品を製作する児童が多かった。国語科の「文章全体の構成や展開を考える」活動と関連させることができる題材である。また、試行錯誤しながら「つくり・つくりかえ・つくる」活動を繰り返すことで得られる「見通しを持って試す力」は、プログラミング的思考にもつながる力であると考えられる。



よさを認め合うことで意欲を高めたり，試行錯誤しながら「つくり・つくりかえ・つくる」活動を繰り返す中で得た見通しを持って取り組んだりする力は，その他の教科の学習においても重要である。図画工作科に限ったことでは無いが，教科の特性を生かして身に付けた能力を，他の教科でも活用していけるような教師の働きかけを行っていきたい。

(3) 全体のまとめ

本校では，児童の実態と教師の願い，学習指導要領の主旨等を踏まえて『児童一人一人が造形的な見方・考え方を働かせ，資質・能力を発揮して，表現や鑑賞の活動を行い，つくりだす喜びを味わうことができる図画工作科の指導はどうあればよいか』を研究主題として設定し，3年間の研究を行ってきた。

① 研究経過

1年次研究では，研究主題の子どもの姿に迫るために，「材料との出合いでイメージをふくらませることのできる授業展開の工夫」に重点を置き，実践研究を進めてきた。授業において，場の設定や題材名の提示の仕方等を工夫することで，やってみたいという意欲を高め，表したいことについての発想を促すことができた。

一方で，「どのように表せば自分のイメージをよりよく表現できるか悩んでいたり，手が止まっていたりする児童に対してどのような働きかけをすればよいか」という課題が見えてきた。



〈材料との出合いの工夫〉

そこで，2年次は，「児童一人一人がつくりだす喜びを味わうことができる教師の働きかけの工夫」に重点を置き研究を行ってきた。授業を重ねる中で，教師から児童への言葉かけと，児童同士の言葉かけ促す教師の働きかけが，児童の造形活動にとって大きな意味を持つことが分かった。

しかしながら，言葉かけを必要としている児童の内面を，表現や表情，仕草，つぶやき等からどのように見取るかという点や言葉かけのタイミングといった点について，さらに研究を深めていく必要がでてきた。



〈教師による言葉かけの工夫〉

こうした課題については，これまでの実践から，働きかけの内容やタイミングを考える際，「この子は前時でも困り感を抱えていたから，友だちの活動で参考になるものをいくつか紹介してみよう」「この子は前題材でも表したいことは決まっていたから，今回ももう少し様子を見守ろう」といったように，1単位時間の子どもの姿だけでなく，前時や前題材での子どもの様子を踏まえて判断することが重要となることが分かった。

さらに，その働きかけがどのような資質・能力を育て，今後の学習につながるかを基に考えていくことで，より広い視野で授業を捉えることができると考えた。

よって，3年次の研究を「題材全体の講師を意識した授業づくりの工夫」とした。

1単位時間だけでなく，題材全体を見通した教材研究を行うことで，“見映えのよい作品づくり”に終始するのではなく，題材を通してどのような資質・能力を育むのかを明確にした授業作りを行うようになった。

さらに，年間を通した題材と題材とのつながりや，この題材



で育んだ力が、さらに、次の学年のどの題材につながるかといった「学年間のつながり」、他教科等の学習内容との関連といった「カリキュラム・マネジメントの視点」をもって授業をつくることの大切さへと、私たちの授業づくりの視野が広がっていった。

② 研究の意義

学習指導要領においても、子どもたちの資質・能力の育成に必要な学びの要素を、単元や題材等、内容や時間のまとまりを見通して整理し、学校教育で育む資質・能力に向けて『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善をしていくことの重要性が指摘されている。

また、福島県版「校長及び教員としての資質の向上に関する指標」に照らし、各教員の教職経験年数（ステージ）に応じて授業構想についての視野を広げていく上でも有効であると考えられる。

「単元や題材、学年、教科等のつながりを意識して授業を構想する」という本校の研究・授業づくりの視点は、こうした点からも大きな意味をもつものであり、図画工作科に限らず、他教科等においても生かしていくことができるものである。

③ 授業研究の在り方

各年次の研究の重点に加えて、3年間を通して取り組んできたのは、「授業の見方」と「授業研究会」の質的改善である。

事前研究では、机の上で学習指導案を検討する前に、実際の材料や用具に触れ、教師自身が手と感性を働かせることを大切にしてきた。

教師自身が子どもの目線に立って授業を構想することで、「どのようなところで子どもがつまづくか」「どのような手立てがあれば、より活動が豊かに展開されるようになるのか」といった想定が細部にわたって検討されるようになってきた。

また、異学年の教員が意見を出し合い、共に考えることで、学年間のつながりの視点など、題材の意義や価値をより幅広い視野から捉えることができるようになってきた。

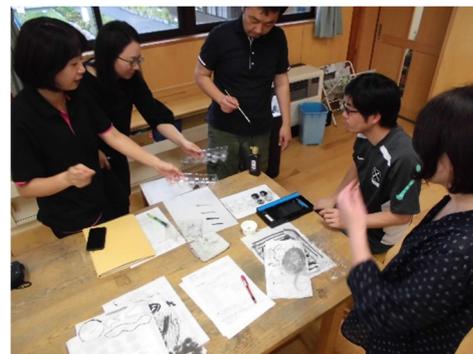
研究授業では、教師の動きだけを見るのではなく、参観した教員がそれぞれ一人の子どもの姿を追い、「その子どもがどこで悩み、どのように考え、どのようなきっかけで次の段階へ進んでいったのか」「そこで、友達や教師との関わりがどのように影響していたか」というように、一人の子どもの姿とその変容を通して授業全体を把握することを意識して授業を参観し、記録してきた。

その際、記録には子どもの名前とその姿が見られた時刻を記入し、授業の後で、同時刻のそれぞれの場所でどのようなことが起こっていたのかを共有することができるようにした。

事後研究会では、記録をもとに、実際に授業で見られた子どもの姿、事実に基づいて話し合うことで、多面的・多角的に授業を分析することができるようになってきた。

こうした、「授業づくり」から「授業の振り返り」と「次の授業へ向けた改善」という R-PDCA のサイクルが確立されたことにも大きな意味があると考えられる。

このように、私たち教員自身が「アクティブ・ラーナー」として研究を蓄積していくことが、図画工作科だけではなく、どの教科等においても教員同士が学び合う風土を醸成するこ



〈手を動かす教材研究〉



〈子どもの姿（事実）を記録〉



とつながると考える。

3年間の研究の中で、授業を扱う材料や用具を先生方が事前に試したり、場の設定を考えて協力して準備をしたりといったことを継続してきた。

〈子どもの姿に基く事後研究会〉

図画工作科における「手を動かす教材研究」の大切さや、同僚性の高まりがよい授業につながるという「チーム学校」としての取組の大切さをあらためて強く感じた3年間であり、図画工作科を通して、他教科でも大切にしたい授業づくりの視点を全員で共有する貴重な機会となった。